

短歌

血潮

上野裕久

銃とりてわれも征きなん散華せん軍歌をきけば血潮たぎるも

双手あげ萬歳さけびくれなゐに染まりて死なんと思ふ日もあり

教練の小銃は徴集られてゆきにしと非常の秋を身近く感ず

今しこを出でて征くらし夜半の床めざめし耳に歡呼どよめくも

弟の軍刀を見つゝゐて二首

何族の血が眞先にちぬらると軍刀を見てゐて悲しくなりぬ

いつぞ来る四海諸族に争闘の絶えにし時はいつの日ぞくる

雪を詠める

つぎつぎと岬みさきのうすれゆき大海原にとけて入る雪

冬休みわが家へいそぐ汽車の中車窓は吹雪の横なぐりなり

踏みゆける靴の形にうす氷はりてゐたりき畑中の道

吹雪をば拂ひつつ急ぐ自轉車の小僧の顔はあかくやけぬき

君が代の旋律ながれ國^{こく}たみは東をろがむ戦勝の新^{はる}春

草もみぢ堤に臥して白川のゆるき流れに夢うつつなり

白川の川面のうすく輝きてかなたの岸のけむりもの憂し

川中の石の頭にせきれいの尾をしばたく靜かなる秋

襲ひくるクツクルをさけ打ち倒しゴールに入りしたくましき顔

揉み押して重なり倒れし間よりころがり出でし卵形ボール

小さき子がわが顔を見て泣きだしぬ長き髪にぞかなしみかすむ

久方に歸り來りて櫻島車窓に迎へば親の如きも

切り立てる山のむかうに高千穂の雪を望をれば下りし信號機

久方に一家そろひて正月ぞ思へば長き病ひなりしが

深淵の渦をまきこみ巻き込みて流るを見れば心吸はれぬ

雑踏の待合室で出會ひたる友の笑顔のいくつなりしか

つけひもの着物をきたる末弟オトワの腰のかはゆさよ抱きたきかな

舊師をば尋ねたづねて訪めゆけば家移りされしあとにてありき

ねころびたき芝生の柵にすぎ間なく制札あるが腹立たしきも

冬の陽は水邊の草にやはらかく漣もすむ水前寺池

白鳥の羽毛はあつし冬の陽を澄みきる池にふはりと浮けり

さしこみし体温計のつめたさに身震ひのする冬の藤椅子

降壇の師に感激のあふれ出てやむとも見えぬ拍手一しきり（大澤博士講演）

熱のある男子とならん君の爲み國の爲の礎石とならん